

# エクストリームシリーズ2013 第1戦 那珂川大会

## 那珂川大会優勝チームコメント

チーム・コナ・ウィン 鈴木 幹久 さん

チームコナ・ウィンとして今年で7年目の参戦となるエクストリームシリーズ。

一昨年、昨年と連覇しているものの、ここまでくる道のりは決して平坦なものではなく、未だ発展途上にあるチームと自負している。

チームが初参戦した2007年の奥大井、リベンジをかけた2008年奥大井では、トライアスロン出身者3名で組み、体力には絶対的な自信はあったが地図読みミスキルの未熟さで完全完走すらできなかった。そして、チームキャプテン道向に引っ張られ、ポロポロになりながらゴールする女性トライアスリート達は、短期間でチームを離れていってしまう。

そんな中、ラブコールを送り続けていた鈴木真樹子が一昨年の桧枝岐からチームに加わった。スキルや体力はもちろんのこと、トップを目差す気持ちの高さが何より素晴らしい。

チームキャプテン道向の圧倒的体力と冷静な判断、そして優勝請負人鈴木真樹子と文句のつけようがない2人に対し、チーム唯一の課題はこの私にある。年々衰えていく体力に加え、レース中脱水症状になったり、転倒して骨折したり、トラブルは後を絶たない。数年前の奥大井で山を登っている最中に両脚がいつぱんにつり、痛さのあまり雄叫びをあげ、それ以来「ゾンビ」のあだ名がつく始末。

そして迎えた、今年の開幕戦。チームには、かつて「KIWAMI」しか成し遂げていない、3連覇がかかっている。その大事な初戦。レースが近づくにつれ、胃がきりきりくるようなプレッシャーが襲ってくる。昨年那珂川の開幕戦、スタート直後のチームチャレンジのクイズでは、私だけが3回も回答できず時間をロス。優勝したトレイルざんまいに3分及ばずの2位となったが、結果として、そのロスがなければ勝っていた。それら数々の不安要素を抱えながらも、「チームに迷惑はかけられない」。いつも以上に強い思いでスタートをきった、つもりだった。

最初は、3チームで大縄跳び連続20回をクリアするチームチャレンジだった。毎回、毎回コース設定も去ることながら、種目を考え、大変な準備をする、スタッフの皆様には本当に頭が下がる。ここは、他チームで最適な大きな人と、チームキャプテン道向による縄回しと息の合った跳びで一発クリア。バイクを最初のチェックポイントへと走らせた。

CP1でも、続けてのチームチャレンジ。何やら洞窟の中に酒蔵があって、この中のどこかにあるクイズに答えるというもの。後に確認すると、ここ「島崎酒造」の酒蔵は、第二次世界大戦末期の戦車の部品工場予定地で、限られた日しか見学できないらしい。こんな貴重な場所をレースで使わせてくれるという地元の方の寛大さがうれしい。しかし、「じっくり見学・・・」などという余裕はもちろんない。

CP2は、恒例となったカヤックセクション。開会式でわざわざ市長さんが挨拶していただいた中で、那珂川は日本有数の透明度を誇る美しい川と言っていたことを思い出す。その美しい川に私がトップで漕ぎ始めた。流れが緩やかな左岸を上流へ進み、急な流れの中にあるブイを難なく折り返し、一気に下流へ向かう。とっ、途中にあるはずのクイズはどこ?下流のブイにある流れ止めのロープを手繰ってみたが、「そこにはクイズはないよー、ひっぱらないでー」とスタッフに言われてしまった。しょうがなくそのまま戻り、クイズは残り2人に託した。せっかく事前に予習した「山あげ祭」に関する事だったが、結局クイズには失敗。10分のハンデを背負うことになった。しかし先はまだ長い。気をとりなおして先へと進んだ。

CP3は難なくクリアしてCP4へ向かう。このあたりからバイクの山岳セクションへと入っていく。CP4のポイントは、指示書にあった「伐採道」。手前の分岐点からポイントまでのびる地図上の尾根を辿るルートも考えられたが、北へ回るルートで意見が一致。まもなく伐採道と思われる山道を発見し、ひたすらバイクを押し進みCP4をゲットした。

他の数チームがバイクかつぎ&藪こぎをしたというCP6へのアプローチは、一つ分岐点だったかもしれない。我々も民家や畑の間からピークまでの最短ルートを探しても見つからず、農作業をしていたおばあちゃんに聞いても、登るルートはないという。ここは、大回りして送電線に近い場所までまわることになった。結果、その判断が正解だった。送電線道を示すポールから道が続いているのを発見。先行するクロマニオンズも同じルートを先行し、鉄塔の下にバイクが置いてあった。我々もバイクを置いて往復することを決め、まもなくクロマニオンズとすれ違った。

バイクからランへと移るCP7では、地元の人が蕎麦をふくまってくれるうれしいポイントだ。しかしここでも私に悲劇がおきた。CP6からバイクで下っている最中に木の枝が右目にあたり、コンタクトレンズがはずれてしまった。片目は生きていたものの、遠近感がとれない。そのままCP7に到着したが、入口の砂利でバランスを崩し落車。チームメイトが美味しそうに蕎麦を味わっている横で、私は予備のコンタクトの装着と、きずの手当てで時間切れ。楽しみにしていた蕎麦が食べれず、がっかり。

気を取り直して、ランセクションへ向かう。今回は14:00スタートということで、ナイトセクションが含まれる可能性があり、

私はヘッドンを予めメットに装着していた。しかし、チームキャプテン道向のヘッドンはスタート時からザックにいたまま。そして、スタート時にメットに装着していた鈴木真樹子は、途中でヘッドンをザックにしまっていた。いわゆる、"何が何でも明るいうちに山を抜ける"という意気込みが、装備にも現れていたのだ。

CP8をゲットした時点で、すでに17:00をまわっていた。「あと30分くらいで暗くなるぞ」キャプテン道向の声が飛ぶ。間もなく先行していたクロマニヨンズを捉え、共にCP9へのルートを模索する。地図上では境界線に沿って南に伸びる尾根を進むはずが、道なりに進むと西寄りに方向をかえた。ここで一旦地図を確認。さらに南に向かう尾根を下るも、途中で深い藪とぶつかり行く手を阻まれた。そして、ここからのリカバリーが明暗を分けることになる。クロマニヨンズの一人が、この藪をさらに南下したのに対し、チームキャプテン道向は、西寄りに進み始める前に、正しい南尾根を予めチェックしていたのだ。3人は来た道に戻り、トラバースしながら正規ルートの尾根にのることができ、まもなく深い谷の向こうにCP9を発見した。

あたりは、すでに薄暗くなりかけて、藪も深くなった。CP10に向かう途中でも一旦方向を失うが、直ぐにリカバリーしCPをゲット。CP11は立ち入り禁止区域の先で、方向を確認しながら進むも、藪が深くなり、一旦地図上にはない車道に出ることにした。そこをキャプテン道向の判断で、ルート方向に登っていくと神社の分岐を発見。トレイル沿いのCPをゲットし、CP12のオオムラサキ公園へひたすら走った。

CP12では、トップで入るも、カヤックのクイズ10分のロスがあるため、とにかく少しでも後続との差を広げることを優先。またもや美味しい蕎麦を逃さざるを得なかった。すぐにバイクに移り、あとは最終CPの花立峠を目指した。しかし、またもや私に不運が襲ってくる。出発時に何故かバイクのチェーンが外れていたのに加え、後輪のタイヤが回らない。どうやら、ディスクブレーキのパッドが戻らなくなってしまっているようだ。しかしここで遅れを撮るわけに行かず、チェーンだけ戻して強引にスタート。しかし、こいでもこいでも、前方を行く2人に追いつけない。体力も限界に近づいた花立峠の手前100m、ついにキャプテン道向が、救世主スーパーマンの如く折り返して私を牽引してくれた。

最後のCP13をとった後は、ひたすらゴールに向けバイクをとばす。烏山大橋が見え、最後の力を出し切りついにスタッフが待ちうけていたゴールへ。この時点で18時28分。カヤックのクイズでロスした10分以内に後続がこないことを祈った。結果は、2位のチームに30分の差をつけ優勝。シリーズの初戦を最高の形でスタートすることができた。

レース後は、早々に片付け、烏山城のお風呂へ行き、表彰式とその後の宴会に備えた。表彰式は、20:00からとのことだったが、その時間までにゴールしたのは5チームのみ。表彰式が始まって、ゴールしてくるチームがくるとみんな歓迎、そして即その場で表彰を受けるという、いつもとは雰囲気の違いアットホームな表彰式だった。

その後の大木須で始まった宴会では、地元の方に、焼き鳥、ホルモン、魚、やきそばや地元のお酒などを贅沢に振舞っていただいた。レースを終え次第に集まってくるメンバーが増え、大宴会の様相を呈してきた。

22:00 過ぎたころ、最終チームがここのチェックポイントに入ってくるという連絡があると、そこにいたメンバーが一斉に入ってくるチームを歓迎。なんと、そのチームは昨年のこの大会でトップを競ったチャリチェリではないか。まさかの最終チームに、声援あり、罵声あり、最大の盛り上がりみせた。

その後23:00をまわって地元の人が帰宅されても、まだまだ宴会は続き、日付がかわって公民館に場所を移し、最終完走チームチャリチェリのメンバーが戻ってくるとさらに盛り上がる。結局宴会は朝5:00を過ぎてやっと終息したのだった。振り返ってみれば、我々のチームで費やしたレースタイムの2倍の時間を宴会に費やしている。レース前に"メインは宴会"と言っていた人がいたが、恐るべしエクストリーマーたちだ。

レースを振り返ると、昨年の桧枝岐、奥大井(私は別のチーム)、そして今回と3戦連続トップでゴールしていることになる。チームキャプテン道向の衰えない体力はさることながら、鈴木真樹子の年々高まる走力の向上がまず、安定したチーム力を支えている。今年は特に数々のビッグレースを控え、一段と身体が絞れているようだ。そしてレースを左右する地図読みでは、特にその場その場の状況判断とリカバリーのスピードが向上していると感じる。やはり地図読み完璧はなく、正しいルートへ進むための裏づけとなる情報をいかに多く持ち、ロスを極力少なくすることが大切だと思う。と、偉そうなことをいいつつ、レース中のほとんどは2人に託しているのだが、最近になって微力ながら地図読みに加えていただけようになったのは嬉しい。冒頭に記した「発展途上のチーム」=「チャレンジャー」という気持ちを忘れず、次の奥多摩につなげていきたい。

最後に、毎回、毎回、厳しく、楽しいレースを演出していただいている、我部さん始めスタッフの皆様々に感謝するとともに、那須烏山の暖かい地元の人々に心より御礼を申し上げたい。

そして、これからも我々の究極の楽しみを提供いただけることを心より願っている。